市民タイムス　令和４年（2022年）８月２０日

OMF 30周年　音楽が結ぶ絆　②

「おらが音楽祭」目指す

サイトウ・キネン・フェスティバル松本（ＳＫＦ）の初回から、運営は市民ボランティアが担ってきた。母体は松本市音楽文化ホールの演奏会を運営していた友の会組織。友の会会長だった青山さんがまとめ役を務め、

ボランティア 運営支える

２年目にはＳＫＦ松本ボランティア協会を設立、平成27（2015）年のセイジ・オザワ松本フェスティバル（ＯＭＦ）への改称前まで音楽祭を支えた。現在は後継の「ＯＭＦコンチェルト」が活動している。

公演日の打ち合わせ（平成５年）。音楽祭は、ボランティアの支えなしには成り立たない

元ＳＫＦ松本ボランティア協会会長

青山（あおやま） 織人（おりと）さん（78） 松本市平田西１

―最初の頃に苦労したことは。

当時、ボランティアは福祉のイメージで、音楽祭のサービス業をする認識はなかった。「善意の表現」ではなく「仕事を分担し責任を果たすこと」と、活動に対する意識をひっくり返すことが大変だった。

―心掛けたことは。

小澤（征爾）さん以下と同じスタッフとして運営することで得られる達成感を、唯一の報酬として大切にした。そのために、やる仕事とやらない仕事を明確に分け、実行委員会と契約を結ぶ自立した組織を目指した。「松本方式」と呼ばれる独自の形態になり、高く評価してもらった。

―どんな思いで携わっていたか。

「おらが音楽祭」にしたかった。小澤さんも演奏家もお客さんの多くも、よその人。松本がただの場所貸しにならないように地元が手を出す、という気概が大いにあり、「地元化への挑戦」の第一歩だと思っていた。

―今、思うことは。

ボランティアは、そばパーティーなどをはじめ一見音楽と関係のない人を（ＯＭＦに）巻き込みやすい。松本の人たちに、もっと手を出してもらい、関わる市民の裾野を広げていってほしい。（聞き手・鎌倉　希）